

○ 高木隆郎氏外

「学校恐怖症の典型像（1）」

① 第1期 心身症的時期

小学校高学年から中学校にかけて、男子に多い登校拒否である。

ある朝、突然に頭痛や腹痛等の心身症を訴えて登校をためらう。親はその病気を理由として学校を休ませる。しかし、お昼ごろになると、元気を取り戻すので、母親も安心する。翌日もまた同じことをくり返す。

② 第2期 攻撃的時期

学校恐怖症が出そう時期で、親の不安、子どもに対する責任が、子どもへの登校の圧力に変わる。

- 子どもは強く抵抗する。（ふとんをかぶって出てこない。便所に入って出てこない。食卓をひっくり返す）
- 法外な高価な物品を要求し、「それを買ってくれるならば学校に行ってやる」という態度をとる。
- 登校を強制される登校時刻に、もっとも激しく抵抗したり、暴れたりする。

③ 第3期 自閉（内閉）的時期

親も学校のことを口にするのを避けるので、ある程度の表面的な安定を取り戻す。

- 自室に閉じこもり、家族の者と一切口をきかなくなる。
- 自閉の状態（いわゆる「自閉症」とは異なり、自分のからに閉じこもり）になり、精神的に退行し、幼児のようにつまらないものを集めたり、終日、無為・無感動に過ごす。

○ 鎌^{やしろ} 幹八郎氏

「学校恐怖症の研究」

① 第1段階 単純な反応の段階

（幼稚園～小学校低学年）

いままで保護されていた環境から、幼稚園、小学校への移行がスムーズにいかないで、以前の親子関係や家庭に逃避する。

② 第2段階 合理化・理由づけの段階

（小学校・中学校を中心に全学年）

登校拒否の理由を、「宿題をしていない」、「給食がいや」、「頭痛」、「腹痛」など、学校状況や身体状況に結びつけてのべるものであるが、その理由づけは、ただ登校を拒否したいものであることが容易にわかるものである。

③ 第3段階 強迫・不安の段階

（小学校中学年～中学校）

典型的な学校恐怖症を示す時期（登校しなければならないという気持ちと、反面、登校に対する統御ができない不安とのかっ藤がみられる。

- 外は一歩も出ない。
- 登校を促されたりすると、パニック状態に陥る。
- 保護者を殴る、ける。
- 障子や窓ガラス等を壊す。
- 家具を壊す。

④ 第4段階 高度の合理化、理由づけの段階

（中学校～高等学校）

論理に一貫性がみられ、「人生は無意味である。生きているのは自分の好きなことができるからである」といったような、知的な理由づけがみられる。

○ 平井信義氏

「学校嫌い」

① 第1期

- 家の人が付き添ったり、先生や友だちがむかえに行くと登校する。
- 前夜、学校の支度をしたり、その朝も玄関までは出るが、敷居をまたぐことをしないで引き返す。
- 本人の希望するおもちゃなどを買い与えると、その当座は、何日か登校する。

② 第2期

- 朝は起きなくなり、起床を促すと、それにひどく抵抗する。
- 起床時刻が次第に遅くなり、昼ごろまで寝ているようになる。
- 起きている間は、自分の好きな遊びをしたり、趣味に属することなどを熱心にやる。
- 学校の話をする時、不快の情を示したり、